こころの健康

第　55　号
平成28年9月
愛知県精神保健福祉協会
（愛知県東大手庁舎）
名古屋市中区三の丸三丁目２番１号
電話（052）962－5377　内線550

■ こころの健康を考えるシンポジム ■

テーマ　～生きづらさを抱えた若者たち～

基調講演

現代思春期論　～今どきの若者かたぎ～

公益財団法人日本精神衛生会理事長　牛　島　定　信氏

【はじめに】

最近、児童青年期関連の学会発表等を聞いていると発達障害が大半を占めている。現在、1960年代に登校拒否や思春期やせ症など、新しい病態が登場したときに精神科医たちが熱く論戦を張った様子はない。その必要はなくなったのであろうか。思春期青年期問題はいよいよ深刻になっているし、現代の若者の心理は20世紀のそれとは違った様相を呈している。矢巾中学のイジメ自殺事件、川崎市の男子中学生殺害事件、大阪の中学生男女殺害事件など新聞を賑わしているし、精神科外来でも不登校、家庭内暴力、さらには精神病性問題もまた拡大し、深刻化しているのだ。そうした現状を踏まえて、現代の思春期青年期の心的特徴を考えてみたいと思う。

【そもそも思春期青年期とは】

思春期青年期という概念が出てきたのは1900年になってからだ。スタンリー・ホールが疾風怒涛の時代と称して青年期を概念化し、Ｓ・フロイトが新しい対象の発見の時として思春期を論じたのが1900年前後である。前者は反抗期という概念を生んだし、後者は世代間境界という概念を準備した。

そして、次の新しい思春期青年期論の高まりの契機が1960年前後のＥ・エリクソンの自我同一性の概念の提唱である。自我同一性とは、生後の親子関係を中心に形成された自己と社会がなす青年に対する期待に応じるなかで形成される自己像との統合を意味するが、ここでモラトリアム（執行猶予）期間という概念が提唱されたのであった。文明化された社会は、若者が社会参加の能力を達成しているにもかかわらず、社会的責務から解放して文化的社会的感覚を研くための時間を与えるようになったというのである。世俗的な生活感覚に加えて、社会のもつ世界観（自我理想、道徳観など）を体内化させ、より洗練化された人間像を我が物とするための猶予期間というのである。エリクソンは背後で生動する忠誠という徳目に注目した。

この考え方を基盤に理論化したのがＰ・ブロスの青年期発達段階論である。対象関係は幼児的ではあるが、第二次性徴が始まることによって登場する同性同年輩の集団（ギャング）を主題とする前青年期、同性の親友を特徴とする青年期前期（中学生）、集団での異性関係が前面に出る青年期中期（高校生）、そして個人的異性関係を深めるようになる青年期後期（大学生）を設定したのであった。この発達論の特徴は、

1900年前後に比べて、青年期が長期化した（3年間が14年間に）ことと同時に、ギャング集団の形成を青年期の始動に据えたことである。

【現在の青年たちの苦悩】

それから半世紀が過ぎた現在、その青年期の発達はどのようになっているのであろうか。私たちが現在の青少年の問題を考えるとき、心に留めておかねばならないことはギャング集団の形成が非常に難しくなっていることである。次のようなケースがある。

男子中学生の相談例である。この4月に進学校の私立中学校に入学した。これまでの成績からみて周囲が驚いたほどであった。ただ、本人は野球が得意で、入部とともにレギュラーとして試合に出るほどの腕前であった。ところが、二学期になったとき、嫌いなB君が仲間に入ろうとしたことを阻止しようとして意地悪をしたことが発覚して、三日間の謹慎処分を受けてしまった。当然、野球部のレギュラーを外された。以来、学校も休みがちとなり、試験を前に「勉強をするの、しないの」で母親と言い争い、朝、登校時にソックスがない、教科書がないと興奮し、ものを壊すなどが出没し、次第にひきこもるようになったのだという。相談に来た父親は、自尊心の高い子で、出来ない勉強を野球での優越感で覆い、他を支配することで安定を保ってきたように思うという。因みに、母親は中学校の教頭であり、父親は福祉関係の仕事に就いている。そして、B君というのは母親が高く評価しそうな成績のよい青年なのだろう。彼が知性をめぐる劣等感をもっていることは容易に想像できる。

このケースで、二つの点に注目したい。ひとつは集団形成のいびつさである。彼の友だち関係は、優越性と支配性に彩られたもので、かつてのギャング集団とは異質なものである。もうひとつは病的な自己愛（ナルシズム）である。野球で優越性を保っているとはいえ、その背後

には知性をめぐる劣等感が見てとれる。優越感と劣等感とがせめぎ合う人格となっている故に、優勝劣敗に過敏な心理は見逃せない。

【集団形成不具合の墓】

最近の子どもたちには、ある種の集団形成をするとはいえ、かつてのギャング集団がもっていた対等性、仲間意識（忠誠心、凝集性）が欠落している。そのため、本当の意味での「子どもの世界」（世代間境界の形成）が形成され難い。みんな一緒という感覚が稀薄なために、親の存在、親の価値観を忘れることがない。どうしてもイジメを主題にした葛藤が集団を支配しやすくなるのである。

この集団形成の難しさは、既に小学生の頃から認められるようである。そのひとつが「中1ギャップ」と呼ばれる現象であろう。これは、2005年に新潟教育委員会が提唱して取り組んでいる課題である。それは、小学六年生が中学校に進んで間もなくすると、イジメが増え、不登校が急増する現象である。教育委員会は、小学校の担任制から中学校の学科制への移行に伴って、一人の教師がクラスをしっかりと支えていたのが、中学での担任は小学生時代のように手が回らなくなり、自主的な集団形成に任されるために生じたのであろうと考えた。小学校と中学校のシステムの違いによる問題ということであるが、むしろ、20世紀半ば既に小学校高学年で生じるといわれた同性同年輩の凝集力を欠き、自分たちで子どもの世界を形成する能力を

落としているという側面は忘れるべきではないかと思う。

これと関連して学校教師のメンタルヘルスに詳しい真金の観察がある。彼女は小学校低学年のクラスで横のつながりが決定的に欠落しているという。例えば、来週の木曜日に遠足が予定され、当日は名古屋駅前に午前10時集合という達しがなされていたとしよう。それを前に、ある日、C子が「先生、木曜日は10時に名古屋駅前集合だよね」と訊いたとする。そこで、「そうよ。間違いないようにね」と返事しておくと、今度はしばらくしてD男が「先生、木曜日は10時に名古屋駅前集合だよね」と訊いてくるというのである。否、それが１～２回で終わることなく、何度となく繰り返されるのである。当然、C子、D男の質問を他の生徒も聞いていてよいはずなのに、聞いていないのである。つまり、先生と生徒の関係はできていても、友だち同士の横の関係ができているとは思えないと、真金は云う。

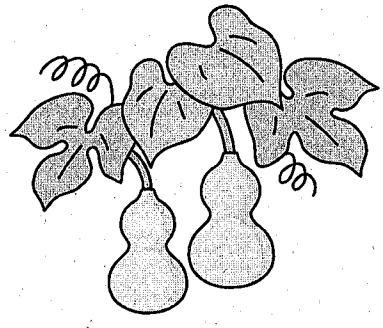
いわば、中１ギャップ問題にしろ、真金の観察にしろ、思春期青年期を迎える入口のところで、最近の子どもたちは親世代との境界を形成して子どもの世界を形成できなくなっているということである。

小学生での問題に加えて、兄弟関係のつながりの薄さもまた忘れてはならない。詩経に「兄弟牆にあって鬩げども、外其の務りを禦ぐ」という言葉がある。兄弟というものは、家にあっては足の引っ張り合いばかりしているが、いざ家庭の外に出て兄弟が屈辱を受けようものなら身体を張って守るものだという意味である。兄弟間のつよい絆を表現したものだが、最近では、その結びつきもまた稀薄になったように思う。児童相談所のケースなどでは、弟がひどい虐待を受けて登校できずにいるのに、お兄ちゃんは平然として登校し続けていたといった話はざらである。その一方で、私のスーパービジョン・ケースで、小6の不登校のお兄ちゃんのプレイセラピーに小３の妹が参加を懇願するので、それを受け入れると、お兄ちゃんの不登校が途端に治ったという経験がある。その直後、ある学会で同じ体験の発表を聞いて感嘆を新たにした経験がある。

さらに最近、小４の男子が２週間ほどの不登校を主訴に来院した。宿題をしていなかったために三人が居残らされて宿題をさせられたことがきっかけのようだった。聴くと、残りの二人は出来が悪く、一緒にされて面目を潰されたらしい。それが明らかになると、同席の母親が「非常にプライドの高い子です」と云い、家庭にあっては解放的で積極的な中２の姉とは接触がなく、ひがみやすく、必ずしも外交的ではないという評価である。母親は職場ではシャキシャキの課長、父親は普通のサラリーマンということらしい。これらを明らかにした上で、私が「なるほど！」と応えると、勘の鋭い母親の「分かりました。家で考えてみます」で診療は済んだ。２週後に、この男の子が登校し始めたという報告を受けた。いわば兄弟間の稀薄さが醸し出す問題の一断面といってよい。

兄弟関係の要諦は親の批判をし合いながら同士のつながりを形成することにある。

第三は家族構造の時代的推移がある。20世紀後半、私たちは思春期ケースを通じて、家父長的家族がマイホーム、ニューファミリー、シングル・マザー、夫婦別姓へと家族構造が変貌するなかで、家庭における父親の存在感が急速に薄れ、現在ではイクメンなる父親像となったことを知っている。この過程で、私は、母子関係が濃密なケースで父親を理想化するような状況



になると、子どもは登校し始め、同性集団に入るようになることを報告し、前エディプス的父親という概念を提唱したことがある。同性同年輩の集団形成に家庭内の父親の存在が重要だということである。そういう意味では、重みを失った父親の存在感がギャング形成にマイナスの影響を及ぼしている可能性は否定できないように思う。

【健康な自己愛の発達】

以上、イジメ色のつよい集団は、それまでの健康な自己愛（ナルシズム）の未発達によるものであると同時に、その後の成長をも阻害することを示している。自己愛とは自分が一番偉いという感覚で、自らの存在感の基盤ともいえるものである。それが同性同年輩集団に入ることによって、自分と同じ人間がたくさん居ることを発見し、それを受け入れることで健康な自己愛が成長するということができる。ともすれば角ないしは刺を出しがちな優勝劣敗の感覚に丸みを持たせてくれると言い換えてもよい。

自己愛は、そもそもemperor childに発するという（S・フロイト）。親が我が子に自分に欠けたもの、成し得なかったことを期待すると同時に、子どもがその親の態度を自分のモノにすることに始まるという。わが国でも天上天下唯我独尊がある。それが、三つで天才、十で神童、十四で秀逸、二十過ぎれば只の人という言葉があるように加齢とともに変貌を遂げる、いわば成長していくのである。親と子が一緒になって形成される心性で、H・コフートがこれを「自己対象」と呼んだことは記憶に新しい。

そして、この自己愛は母子関係、兄弟関係、父子関係を経て、小学生の横関係、さらには同性同年輩のギャング体験を通じて成長していくということができる。ところが、上述したように最近では健康な自己愛発達の基盤となるこうした関係がいびつになり、未発達な自己愛を基盤にした人間を作り出しやすくなっているということではないかと思う。

病理的な自己愛は、一般に自分は特別だという感覚（誇大自己）、周囲はたえず賞賛を送るべきだという密かな主張、そして他に対して同情、共感を示すことがないという人間像（いわゆる自己愛人間）を作り出すといわれてきた。忘れてはならないのはその背後につよい劣等感を秘めていることである。それだけに、逆にその劣等感が表面に出てしまった自己愛の病理もあることも忘れてはならない。森田正馬が描いた神経質のなかにその典型をみることができる。もちろん、両者の間には、さまざまな移行の状態があって、それを基盤にさまざまな神経症々状を呈することになる。

【代替えの集団体験】

留意しておきたいのは、すべての子どもがイジメ色を内蔵した集団に呻吟しているわけではないということである。多くの子はそれを上手に避けて社会体験を積み重ね、成人への途を歩んでいる。筆者が臨床や企業等の入社試験を通じて知ったのであるが、最近の若者は、代替えの集団を通じて、新しい成人への途を形成しているといってよい。他にもいろいろとあると思うが、浮かぶままに列挙してみると以下のような現象がある。

ひとつは、地域のスポーツクラブ（野球、サッカーなど）、ボーイスカウト、塾、あるいは書道などの文化的活動がある。第二は、疑似大人社会とも云える生徒会役員、集団の世話役の経験がある。第三は、世代の異なる集団体験がある。ある女子は高校卒業に失敗した後、海外の語学学校に入って生き返った。曰く、同級生が20代、30代といろいろなのに救われたこと。またアルバイトも同じ体験を生むようだ。さらにはボランティア活動、地域でのお祭り体験などもそうであろう。これらに共通することは、集団形成に大人たちが何らかのかたちでかかわっていることである。

最近の子どもたちは、大人が作ったこうしたシステムを通じて社会を知る過程を踏むようである。一方、不適応の子どもがこうした集団体験に救われることも少なくない。

【同性同年輩集団は今】

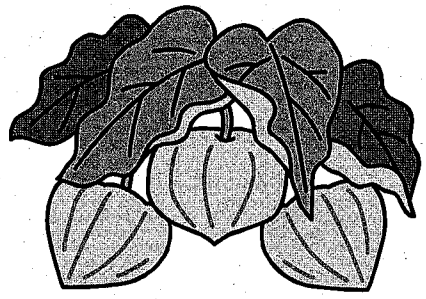
それでは、現在の若者は、我らの世界を経験しないままなのか、という疑問が残る。この点について、筆者は、大学院修士課程の修了式での学生の発言に大きな示唆を受けた。終了式でみんな揃って二年間で得たものは仲間を得たことですと云って憚らないのである。指導教官に対する感謝の声が一つも聞こえてこない。その後、WBCの日本チームの優勝（2009）が筆者の頭のなかでこれにつながった。前年、強烈な指導性をもつ星野監督が北京オリンピックで散々な結果で終わった後、日本チームは穏やかな原監督を仕立てて渡米したが、予想に反して優勝をしてしまったのである。聞くと、イチロー君を中心にみんながまとまった結果であったという。次年のFIFAワールドカップ南アフリカ大会でも優秀な成績を残したが、選手たちが帰国したときに口を揃えたのは、このチームでもう一度試合をしたいということだった。さらには、なでしこジャパンの優勝（2011）である。選手はみんな団結力、仲間を口にした。見ていると、20代半ばから30代後半に至るヤングアダルト世代が同性同年輩のつながりを大事にし、それが社会的成果とつながるという図式がみえてくるのである。同期の会、女子会なども同質のものである。うつ病のリワークプログラムの成功例にもまたそうした側面がある。

これらを考えると、従来の思春期は、現在ではヤングアダルトになって始まると云っても過言ではないような気がする。思春期の初来がずっと遅れたのである。

【現代の若者の精神的成熟とは】

若者は、かつて小学校高学年になると、大人社会に対峙して我らの世界を形成するなかでより成熟した自己（自己愛）を育む途を辿っていたが、最近では今しばらく大人が関与した集団を体験しつつ社会を識り、20代後半になってやっと我らの世界を形作るようになる。こうした大人が関与する集団で、人との付き合い方、身の振り方、感情の処理の仕方などの社会的能力を身に着けていくのであるが、その心理的基盤になるのは新しい自己の発見、周囲に自分と同じような人間が居たという驚きとともに、彼らと一緒に居る自分の発見でもある。本論の主題である自己愛とはそういうものである。

これらは、現在、ひきこもりなどの社会参加の困難者にもまた適用されることになろう。病棟での集団体験、思春期療育キャンプ、お祭り参加、農業体験などいろいろがあるが、注目すべきは、本シンポジウムでひきこもり者への支援のなかで力説されているフリースペース（社会が準備した集団）のなかで当事者がもつ内的な体験である。本稿の主題として扱ってきた自己愛の問題でもあるのだ。これらは、考えてみれば、森田療法のなかで治療の目標とされる「純な心」と相通じるものでもある。つまり、筆者がここで論じてきたことは、古くから論じられてきた「自然」、「あるがままの自分」といった概念と通じるもので、自己愛とは決して現代人だけの問題ではない。



おわりに

かつて思春期青年期の始まりといわれたギャング集団は、現在ではイジメの色合いを帯びたものになりやすく、自らの誇りと友への親しみ、尊敬を育む機会とはなり難くなった。それに代わるものとして、大人が関与した新しい集団体験が重要な意味を帯びるようになった。それらを活用して、現代の若者の人間的成長を促すことが重要であると論じた。

ここで忘れてならないのは健康な自己愛の成長という視点は、古くから禅や森田療法などのなかで論じられてきた「あるがままの自分」という概念と通じるものであり、時代とともにその姿かたちが現代的装いを持っていることに留意すべきと論じた。

（日本精神衛生会「心と社会」46巻４号から転載）

シンポジストⅠ

学校現場から不適応・不登校などの現状

愛知県臨床心理士
スクールカウンセラーコーディネイター
前田由紀子 氏

最近私が感じている子どもたちの特徴として、まず第１点なのですけれども、身体と感情・気持ちというものと、頭・考えていることというのが、何かちぐはぐというかバランスが悪い。頭で言っていることと体で感じていることが、ずれちゃっているなという感じがします。実体験の乏しさがあるかなと思います。

すごく小さな子が、いろいろな知識をたくさん知っています。まず、すべてにいろいろなマニュアルがあります。マニュアルはたくさんあるのだけど、では、実際にどうかというと、なかなかそことがつながっていないという感じがとてもするのです。

それともう一つは、いろいろな人と出会っていない。不登校になってしまうと、本当にこの子にかかわれる人が誰もいない。親のかかわりも少ない。交友関係も少ない。スーパーのレジのお姉さんはしょっちゅう変わります、コンビニのお兄さんも変わります。小さなお店で買っていた時代とは、全然違うということです。

つまり、いろいろな人がいろいろな声をかけてくれて、ああ、大きくなったね、こうだね、ああだね、そうだね、みたいな。そういう人とのつながりが人間というものをつくってきたんじゃないかと思うのですが、そういう、人が人として育つ器の弱さとか薄さをものすごく思います。

この子・私というものを、小さい頃からずっと知っている人というのが、全然いない。一緒に喜んで、一緒に悲しんで、守ってくれて、かつ、だめでしょと叱ってくれる人、そういう大人のかかわりというものが、子どもたちに体験できていないということを、ものすごく思います。

親自身がもう既に、対人関係がとても少ない。初めて見る赤ちゃんが自分の子、という場合がものすごく多い。そんな人に、上手に育てろと言っても無理だと思うのですけれども、でも、頑張って育てなきゃと思う気持ちはあるんだけど、そこらへんが空回りしちゃっているなという気がするわけです。

それで、分からないからどうするか。大体何で調べるかというと、ネットなのです。

私たちの時代は、少なくとも育児書でした。ある思想に基づいて書かれた１冊の本を複数読んだりしましたけれども、それなりに本を読みますから、それなりにつながりがあります。でも、ネットで検索すると、ばらばらな情報がばらばらに存在して、検索するとだっと出るので、余計に分からなくなります。

もう30年以上健診にかかわっていると、最初のころは、子どもの困っているときの遊びはキーホルダーだったのです。それが携帯になって、今はみんなスマホです。スマホで遊んで、動画を見せて泣き止ませるみたいな。もちろんお母さんがあやしている人もいますけれども、結構

困ったときは動画を見せて黙らせるという感じです。タブレットのしまじろう君に、みんないろいろなことを教えてもらいます。歯磨きから着替えからお絵描きまで、全部しまじろうが教えてくれます。よくできすぎていて怖いです。

そういうことで全部やっていってしまうと、お母さんがかかわらなくてもしまじろう君が教えてくれるんです。そういう中で、集団で横のつながりというか、横どころか、１対１で人間同士で遊ぶということの体験自体が、とても下手くそです。

児童館なんかに行ってもいやになるんですけど、絵本の『はらぺこあおむし』をプチッとやって、児童館の職員が流すのです。せめて児童館でぐらい読んで、と思うのですけど。それはこの人のほうが上手ですけど、顔を見ながら今日のメンバーを見て、保育園の先生がやる下手くそな『はらぺこあおむし』のほうがいいんじゃないかな、と古い私は思うんです。やはりそういうところが、どんどん、どんどん、生の人間のつながり・関係性みたいなものが、奪われて育ってしまっているような気がしています。

核家族です。もはや、ちびまる子ちゃんのような家庭なんか、どこにもありません。あれは幻想です。トイレのにおいもしません。死の体験もありません。

学校なんかに自殺企図があったりして、そういうところの緊急支援にも入ったりします。先生は蒼白なのです。担任の先生にまず聞くのは、「先生、これまでお葬式、近い人が死んだことある？体験ある？」と言うと、大体若い先生は「ない」と言います。一緒に住んで、一緒の空気を吸ってきた人が亡くなるという体験をしたことのない若い世代というのが、ものすごくいるわけです。老醜を感じたことのないお母さんお父さんたちが、子育てをしています。

家庭内のお誕生日会も、ファーストフードです。おうちの中ではありません。

職場とおうちとは離れています。転勤・転居で、広域での結婚をしています。ネットで日本のあっちとこっちで結婚されます。よい出会いがあってよかったなと思いますけれども、小学校なんかも地域外で登校していいよとか、そのメリットもあると思いますけれども。地域で通いながら、地域のおじちゃんおばちゃんに声をかけてもらうという体験もせずに、私立の中学校に行ってしまったりすると、本当に地域と切り離されて、子どもたちは育っていってしまいます。

繰り返しますけれども、そのような、人と生の生き生きした体験や交流を持たずに、残念ながら育たざるを得ない子どもたちが、たくさんいます。そんな子どもたちの中で、私の印象に残っている三つのケースを話してみたいと思います。

①Ａ君のケース

きちんとした家庭に育ったＡ君（中１）、不登校になりました。警察官のお父さんに、料理研究家のお母さん、少し年の離れたお兄さんとお姉さんは、本当に手堅くまじめで、それなりの就職もされています。

運動でも学習でも優秀な成績で、友人への配慮もできて、リーダーシップもとれる子として、小学校からの申し送りで来た男の子です。でも、後で聞いてみると、何かがあると、時におねしょをしていたということでした。

その子が、ちょっと大変なクラスに入ってしまって、学級崩壊というか、先生をちょっとばかにするような雰囲気のあるようなクラスでし

た。彼は全然自分は悪いことをしたと思ってないことで、担任の先生から見たら、彼なら先生の注意が入るだろうと思ったので、見せしめと言うと言葉が悪いですが、あることに対して叱ったのです。

でも彼としては、なんで僕がこのことで叱られなきゃいけないのかという意外感・失望感、それ以外にもいろいろあったのですけれども、そのへんがきっかけになって、夜尿をする。夜尿をして、中学生にもなってとお父さんにものすごく厳しく叱られる。いろいろなことがありまして、その後、完全に不登校・ひきこもりになってしまったというケースがありました。

先ほど牛島先生からお話があったように、価値観を10歳ぐらいまでにきちんと親かや大人たちから教えられる。この子もきちんとお父さんお母さんから、お兄さんお姉さんから、正しい価値観をきっちりと教えられてきた。それを自分のものにしていく入り口で、本当にささいな、自分では思いがけない、自分は悪いことをしたと思わないところで叱られてしまった先生やお父さんの対応に対して、大混乱をしてしまったんだろうという気がします。

この問題は、正しすぎる価値観みたいな気がします。やや現実離れした、ほかの子たちから見たら、えっ、そんなの、そこまで正しくなくてもいいんじゃない？というぐらい、お父さんお母さん、お兄さんたちも、少し世代も上ですし、今のこの子たちとは10年ぐらい違うギャップもあったりしたと思うんです。そういう中で同胞の子たちとの価値観の違いとかもたぶんあったのではないかと思います。本当に閉ざしてしまいました。

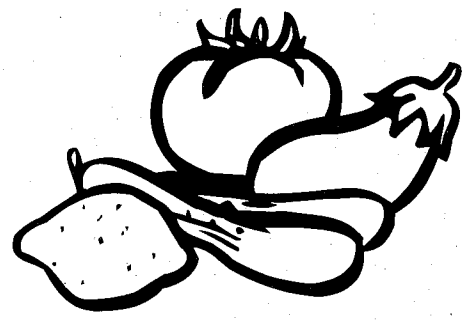
そうなると、彼にかかわれる人が、お父さんお母さん以外に誰もいない。お父さんに対しては彼は背を向けてしまっているので、お父さんもお母さんも一生懸命なのですけれども、一生懸命すぎるところがあって、そのへんで苦しくなってしまう。こういう本当に一生懸命やってきたおうちで、大変なことが起きちゃうんだなというのがありました。

②B君のケース

B君（高1）、不登校。この子の家もちゃんとしたおうちです。ゲームはさせないという方針で、スマホ・携帯も高校からです。でも、よくよくB君から聞くと、ゲームをしないということは、同世代の子と遊べなかったと言うのです。持ってないから遊びに行けない、遊びに行ってもやらせてもらえないから行かないということで、小学校時代はほとんど自分の家で漫画を読んで過ごしていました。

スマホ・携帯は中学校からみんな持っているので、中学校を卒業するときに、みんな大体メアドを交換したりするのです。それで、高校へ入ってから中学校の友達にアクセスできるんですけど、中学校時代に持っていないと、それができないのです。もうそこで、中学校の友達と切れてしまう。そして、高校をちょっと遠くに離れたところへ行ってしまうと、中学校の細々したお友達関係からも切り離される。子どもが望まないからといって、無用な習い事もさせない。習い事のお友達もいない。完全に孤立なのです。

その中で、中3に入った厳しい進学塾で、結構お互いを引っ張り合うような、ちょっといやだなという感じの対人関係があったようです。そうなると、楽しい同世代の体験というものなしに、過酷な、引っ張り合うだけの友達関係、そういう同世代とのかかわりだけになってしまったのです。



そういう体験しかない彼としては、第１希望に行ければまだよかったんですけど、第２希望に入ってしまった。そうなると、トップ高校じゃないところというのは、もさもさっとした、ちょっと悪っぽい子も混じっていたりするのです。そうなると、彼はそのカラーに全く乗れないのです。１年生のときはまだよかったんだけど、２年になって、少し体育会系の先生や、体育会系の子たちの多いクラスに入ってしまったら、全然なじめない。もう地獄という感じで、学校に行けなくなってしまったのです。

そういうときに、お母さんお父さんは冷静なのです。きっとどこかで苦しんでいらっしゃると思うのに淡々として、「大体、望んで入った高校じゃないからいいんです。ほかにいろいろあると思いますけどどうしましょう」と淡々と進めるんですけど、全然子どもは、次なんて思えていないです。同世代の子の中に入るのはいやだ。でも、高校には行かなきゃいけない。そういうところで、ものすごく引き裂かれてしまい、苦しいというＢ君でした。

本当に、人とかかわる体験の圧倒的な少なさ。それでまた、お母さんたちも泣いたりわめいたりしないのです、Ｂ君の前では。もどかしいのです。だから、Ｂ君自身も、何となく自分の感情にとても疎い。正しいことを取捨選択する主体が育ってないなという気がします。価値判断が本当に他律的というか理念的というか、バーチャルな感じで、じゃあできるのかというとできない、けど、でもと頭の中だけでぐるぐるしてしまう感じがとてもある子でした。

③Ｃ君のケース

Ｃ君はお父さんもお母さんも崩壊家庭に育って、本当に世代間連鎖のある、大変なおうちでした。この子は長男で、多動かつパニックを起こすという診断を受けている重い自閉症の次男と、すごく年の離れた三男・四男がいて、それで結局、彼が全部我慢せざるを得ないという状況の中で、時たまキレて、そのキレることが、彼が発達障害じゃないかとかいろいろ言われて、児童相談所に措置されて入れられて、そういうところにものすごく不信感があるお子さんでした。

そういう子が中学校に入ってきて、いろいろ話していると、夢はディズニーランドのスタッフなのです。やはり彼らしいですね。だから、やはり少し現実離れしたところでしか、夢が描けないんだなと思いました。

でも、ここの家でよかったことは、全然よくないんですけど、お父さんが労災に遭いまして、重度の障害を持ったのです。そこで、福祉の支援がどんとそのおうちに入ったのです。その中でＣ君の負担が「ああ、大変だったね、Ｃ君」みたいに学校はずっと言い続けてきたのですけれども、学校だけじゃなくて、みんながＣ君大変だったねと思うようになったときに、Ｃ君が随分落ち着き、家族自体も落ち着いたということがありました。

こういうことから見ると、やはり家族全体を支援する視点というものを持っていないとだめだな、この子だけを見てもだめだろうなと思います。

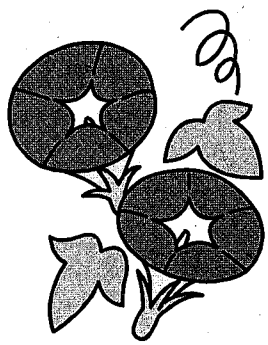
Ａ君、Ｂ君は正しすぎて、極めて狭い価値観の中で育ってしまった弊害があったわけですけれども、Ｃ君のようにばらばらになってしまうと、一貫した価値判断が育たないです。そんな中で、発達障害の疑いを受けてしまう。だから、発達障害の診断を受けてしまっている子の中にも、このような子はたくさんいるんじゃないかと思ったりします。

支援について考えるというところなのですが、Ｃ君じゃないですけど、この子の問題行動、学校でこんなことをするとか家でこんな悪いことをしたとか、そういうその子の一部分だけを見る、あの親がだめだであかんわとか、そういう「部分」じゃなくて、この家族の中でのこの子、この家族はどんな環境にあって、どんなことがあるからこんな状況を呈しているんだろうとい

う全体を見る視点、福祉的な視点を持ってかかわることが、とても必要なのではないかと思います。

それから、やはり実感がないというところですから、支援者自身が実感を持って関与できるようなスタンスで関与する。だから、話を聞いているだけじゃなく、私も家庭訪問にも行きます。現場に足を運びます。この狭い家の中で、これだけの家族が住んでいるのね。その中で、怒れるよね、キレるよね、いやになるよね、というリアリティを持ってC君としゃべることで、そうだよね、じゃあどうやって、こういうときにはどうしようね、という作戦を立てる。現実の生活をどう切り抜けるかというところで話をしていく。その子自身も自分がだめとか、お母さんも私の育て方が、じゃなくて、この家庭環境とかこの住環境が悪いよねとなるところで、やはり何か次の新しい手が見えてくるのではないかと思ったりします。

当事者の主体感、自立感というところがとても大事だと思います。つい、対人関係が少ないとモノローグになってしまいます。何か相談を受けると、つい説教をしたり助言をしたり提案をしたりしがちなんですけど、それはこちらからのモノローグなのです。それを、何に困っているの、私はこれはできると思うよ、どうだろうという、お互いのダイアローグに変えていくところ、ダイアローグが成立するところは、関係性が成立するということですから、モノローグである限りは、関係性は成立しないかなと思っています。モノローグよりダイアローグということをお伝えしたいと思います。



シンポジストⅡ

養護問題から児童虐待とアディクション

全国児童養護問題研究会会長
喜多　一憲 氏

私は、養護問題から、今の思春期から若者の状況を報告申し上げたいと思っております。

まず、社会的養護の現状ということであります。時間がないのであまり詳しくはできませんけれども、厚生労働省の家庭福祉課が出している資料をご覧ください。

社会的養護とは何か。養護施設とか乳児院とかの施設には、保護者のない児童、被虐待児など、家庭環境上養護を要する児童などに対して、公的な責任として社会的に養護を行う。「公的」という言葉はある意味では、児童福祉法の第２条に、国及び地方公共団体は養育の責任がある、いわゆる保護者とともにということですけれども、保護者が養育できない場合には国が責任を持つということが、うたわれております。その意味での公的な責任ということでございます。

そういう中で、社会的な養護の現状というものは、里親、それから施設がありまして、この全体を通して大体４万６千人から４万７千人ぐらいいるだろうという統計が示されております。

社会的な養護の中でも、数的にも一番多い児童養護施設は全国で601個所。そして、３万３千人ぐらいの定員がございまして、２万８千人ぐらい、大体84～85パーセントくらいの入所率となっています。

しかしこれは、都市部がもうかなり満杯になって、地方部はちょっと空きがあるという状況で83～84パーセントということでございます。

入所の理由ですが、34.8パーセント、1,778名が父母の虐待ということで入っております。それから、父母の放任怠惰、11パーセント。それから、養育拒否となります。これは私どもは、すべて虐待ということで捉えております。全部

で5,108人。これだけ、多くの虐待があるということでございます。

全国で児童相談所に虐待の相談があった件数が、25年度については７万件を超したということで、毎年更新をしているところです。

そういう中で、児童養護施設に入所している子どものうち、６割は虐待を受けているとなっておりますが、実態的に私どもがいろいろ子どもの話を聞いたり、親の話を聞いたときには、やはりかなりの虐待を受けている。体験的には児童養護施設の７割から８割は虐待を受けていると感じます。ある施設では養護施設の９割が虐待を受けたという調査もございます。

情緒障害児短期治療施設は心理療法をする職員（心理療法士）の配置が非常に高い施設となっています。つまり、虐待を受けた子どもが、非常に大きな問題を抱えているということでございまして、ここでは71.2パーセントになっていますけれども、実態的には９割から10割近くという報告もされております。

児童養護施設を中心にして見てきたところでございますけれども、障害等のある児童の増加ということもございます。

その他の心身障害で読み上げますと、広汎性の発達障害、それからLD、ADHD、これはもうどんどん増えてきている。それから、知的障害も増えてきている。これは複数回答になっておりますけれども、全体の28.5パーセント、３割近くがこういう障害を持っているというのが、現実的な養護施設の状況であるということをまず、押さえておいていただければと思います。

そういう中で、いわゆる愛着障害が非常に多くなっております。人間関係性が十分にとれていない、小さいころのアタッチメントが、十分にできていかないということであります。ここでは何が問題になるかというと、親に対しての信頼性、あるいはほかの人への信頼性が、十分に育っていないということでもあるわけです。

それから、攻撃性。これはある意味では自己防衛のための攻撃ということも非常に多くあります。暴力を伴うこともありますし、他者だけではなく、自分に返ってくる攻撃性もあります。いわゆる自傷ですね。リストカットとかもあると思います。

それから、自己否定ということであります。虐待を受けるのは僕が悪かったからという思いやすべて自己を低く見るという面から、自己肯定感が育たないということが多くあります。

それから、非行ということでございます。ある意味では欲求が十分に発露できないことで、非行という形で出てくる。ここには、他からの承認が得られないことにもつながっていくんだろうと思います。

それからPTSD。これはトラウマを受けて、それが引き続いていっているということで、このPTSDの症状が見えたら、児童養護施設の中で生活はできるとしても、通院あるいは入院が必要になってくるということが言えると思います。

子ども虐待は、脳の発達にかなり影響を及ぼすということが、いろいろな治験から報告されています。

子ども虐待の背景にあるものということで、これは家族の問題ということでもございますが、貧困がかなり通底しているということが養護問題にはあります。いわゆる経済的な貧困だけではなくて、人間関係性の貧困が、それに媒介していくところもあります。

あとはその中で、貧困が暴力を生んでしまうという、このメカニズムというのは、やはりあるわけです。これがある意味では暴力支配として、親が子どもを支配する。そしてそれが、日常生活のネグレクトに通ずる。日常生活のネグレクトというのは、最低限度の生理的（欲求）、あるいは生きるということのネグレクトです。子どもは本来は誰かの手を借りて、衣食住を含めて生活、そして人間関係性をつくっていくのですが、それを省略されているというネグレクト。そういうことで、情緒的な関係不全、ここ

には多くはアルコール依存症の親、父親だけではなくて母親も、絡んでくることもあります。

最近は母親の精神障害が多くなってきています。それと、そういう中で両親の不和、いわゆるけんかとか言い争いとか、ときには暴力的なDVも見られることもあるわけです。そういう中で地域社会からの孤立ということで、家族が地域から孤立し、そして子どもが家族と地域から孤立をしていく。では、どこに居場所を見つけるか。ある意味では漂流していくということでもあるわけです。

それともう一つは、親の拘禁。これも最近少し多くなってきております。何か犯罪に手を染める、あるいは薬物で逮捕されるという傾向も結構出てきています。

そして、不安定就労が貧困問題をきたすということは、非常に大きな課題です。この貧困問題が、アルコール依存とかDV、それから暴力・虐待につながっていきます。

虐待防止法ができているので、かなり改善といいますか意識は高まってきたのですけれども、まだやはり暴力支配が、しつけと称して確信犯的にされているケースも見られます。

しかし、この親についても、実は自分の親から厳しく育てられ、そして、現在は社会的な地位もあり経済的にもいいわけですけれども、奥さんが出て行ってしまい、自分一人で子どもを見る。夜6時に寝ろとか、そういう自分の都合に合わせた縛りをする。これは子どもにとってはやはり支配されているということであります。いわゆる虐待というのは、暴力の支配と被支配の関係ということであります。しかしその背景をどのように見ていくかということが、大事になっていくんだろうと思います。

親から虐待を受けて施設で育った子どもたちの事例ということで、NPO法人で手記を出しています。ここで、6年後の便りということで、3年ごとの6年間で出しているある女性の手記を紹介したいと思います。

最初の6年前に出したのが、23歳の女性でした。父親が行方不明で、母親が精神病院に入院した。3カ月のときに乳児院に措置されたということであります。

「母のことは物心ついたときから嫌いでした。なぜ嫌いだったのかは分かりません。母の顔を見ると憂鬱な気分になったことを覚えています。」

いわゆる母からの身体的な虐待もあったということもございます。そこで、施設を卒業したときの思い出ということで、何となく高校に行って、悪さをして退学になった。社会に出てみて、施設の暮らしのありがたさを実感しましたと。そういう中で、悪いことをしても誰も止められないという生活で歯止めが利かず、心身ともにぼろぼろになってしまった。

「そのうちに覚醒剤にも手を出すようになり、そして毎日覚醒剤に溺れていきました。未成年で風俗店で働き、覚醒剤で警察に捕まりました。少年院に入ることになりましたが、そこでの生活に不安はなく、安心して生活できました。」

「その3年後に結婚をして、二人目の妊娠中の6カ月に、私は夫と離婚をしました。度重なる暴力と夫の逮捕。子どもから父親を奪ってしまうことに少しの迷いはありましたが、夫婦としてやっていけるのか疑問を感じ、シングルマザーの道を選びました。」

今現在は、この二人の子どもと何とか一生懸命頑張っているということで、きております。

私は、やはり虐待を受けたその子どもの不全感とか、不安感とか、かなりあると思うのです。例えば親がいないという不在感というのは、やはりあるわけです。それから愛情を受けていないという不足感といいますか。それから、人間関係の不信感とか、生理的に不快感、食べられないということもあるわけです。そして、心の傷、痛手感。快さの希薄感、それから社会的なスキルの欠如感、あるいは未来の不安感。虐待というのは、こういうことを、小さな体、小さな心の中にどっしりと落とし込んでしまうとい

うことなのです。子どもにとって、非常に大きなリスクになっていくんだろうということであります。

それから、児童虐待とアディクションについて思うことでありますが、依存症の親は虐待を行うのか？これは決してそうではないと思います。それから、虐待を受けるとその子どもも依存症になるのか？これもそうでもないと思いますけれども、ハイリスクなことは確かだと思います。

虐待の世代間連鎖は、ある学会では３割程度がなり、７割は何とかサバイバーとして一生懸命やっている。３割は世代間の連鎖があると統計も出ておるのです。しかし、やはりその中で依存症とかの親、あるいは同居人がそこにいるということも、リスクが高いということになると思います。

本来的な子ども期におけるアディクションというのは、本当にあるのかなと思いながらも、最近、子ども、思春期にも常にそういうアディクション的なところがあるんだろうと思います。特に今、携帯電話とかネットが非常に注目されているところであり、施設の中でも非常に大きな課題になっているところでもあります。

そういう中で、終わりにということで、養護施設でできること。養護施設だけではもちろんできないわけですけれども、まずは日常の生活づくりと、人間関係づくりだろうと思います。これは牛島先生もおっしゃっていましたけれども、やはり仲間づくりをどのようにしていくかですね。子どもの集団づくりと仲間づくり。これは大人との関係の中で共有体験をどのように高めていくのかということが求められてきます。

これはある意味では、児童養護施設が生活の総合性というか、すべての人間関係性、衣食住も含め、総合性をきちんと担保しなければならず、心理療法、または精神科の治療は欠かせないということでもあるだろうと思います。

児童虐待とアディクションというテーマでありましたけれども、十分な治験は持ち合わせていないのですが、養護問題の現状をとおして、一歩手前の症状というのは多数あるということ、リスクが高いということを私の報告といたします。

シンポジストⅢ

ひきこもる若者の現状と支援

白梅学園大学子ども学科教授

長谷川俊雄 氏

私は８年前まで愛知県立大学で教鞭をとっておりました。現在も愛知県庁でひきこもりにかかわる委員会や相談業務に従事させていただいています。

今は横浜でNPO法人を立ち上げて、ひきこもりとうつの若者が通える地域活動支援センター・つながるcaféを仲間たちと運営しています。

ひきこもりの定義ですが、新ガイドラインでは『様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には６カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい※下線は筆者）を指す現象概念である』となっています。

外出をしていてもよいということは、旧ガイドラインには掲載されていなかったこと。この新ガイドラインから、外出していてもよいと書いてあるのは、つまり外出できるひきこもりもいますよということを意味しています。その意味でいうと、外出できるかどうかがひきこもりの判断基準になるのではなく、その人がどのように人と向き合うのか、向き合えないのか、そこを基準にしたガイドラインということが言えると思います。

このひきこもりという言葉は状態を表す概念ですが、精神病を背景にしたひきこもり、発達障害を背景にしたひきこもり、そして、病気でも障害でもないひきこもり。大体３ぶんの１ず

つぐらいと私も臨床経験の中で捉えています。つながるcaféの利用者たちも概ねそう捉えています。

ひきこもり相談は、ご本人が登場しないことが多いという特徴があり、ご本人が登場するまではお父さんお母さんのお話を伺いながら、この三分類のどれかというあたりをつけながら、家族支援を行うことになります。ひきこもり支援はこうした精神疾患や発達障害の知見や情報・知識が必要になるということ、そして同じ背景のひきこもりであってもひとりひとりみんな違うという個別化の視点から見るべきです。

ひきこもりに概数把握の全国調査は二つあります。国が18年度に行った調査では約26万世帯。H22年、内閣府の報告書では、狭い意味でのひきこもりは18年度の調査と大体同じ数字が出ています。しかし、外出できる準ひきこもりをカウントすれば、全部で66万人ぐらいになります。これはかなり高い数字だと思っています。

統合失調症の患者さん（全国で110万ぐらい）と比べると、医療支援、就労支援、生活支援が十分に制度化されていない、社会資源が不足しています。支援の体制やサービスの不十分さがご家族とご本人に苦労を手にさせていると言えるでしょう。

ひきこもりの若者の内面の特徴

こだわりが強くて頑固で融通が利かない、特有の傷付きやすさを持っているという、対人関係を構築・維持するためには難しい要素を持っています。強迫的、固執性、救助発信困難性といった特徴があります。彼らは助けてと自ら発信しない人たちです。だから対人関係からひきこもっているのです。

家族に対して本音と本心を語れないのは、内因的な問題が影響していることもあるでしょう。しかし、親子関係の中でのディス・コミュニケーション、つまりコミュニケーション不全の影響と見ることもできます。それは親だけで

はなく、学校の教師との間で、何か本音や本心を語ったとき、「そんなこと言うのはおかしい」「つべこべ言わず、頑張れ」と言われる経験をとおして、社会に出て行くのはわけないだろうと、つまり水戸黄門のように正論で返されてしまい、本音と本心を言うことで傷付く経験をたくさんしているのです。そういう結果として、対人関係におけるディス・コミュニケーションという状況が起きているように受けとめています。

親と子の関係性について

ひきこもりの初期の段階では対処できる可能性があると思いますが、実は「親の良かれは子どもの迷惑」という関係性がひきこもりの初期の段階で繰り返されて、結果としてひきこもり状態が深まってしまうことがあります。親は誠心誠意に子どもへ働きかけます。しかし、子どもは親の言うことを実行できなかったり、違和感を持ったりすることもあるわけです。つまり、親子関係に緊張や対立を強めてしまい、ひきこもり問題の外側に生まれた家族関係（親子関係）問題が大きく膨らんでしまいます。しかし、親は真ん中のひきこもり問題をどうにかしようと働きかけてしまう。そうではなく、ひきこもり状態を緩和するためには、遠回りのように思いがちですが、家族関係（親子関係）問題を緩めることが、支援者にとって必要な課題になります。

しかしお父さんお母さんは、いや、私たちが問題ではない、親子関係の問題ではない。子どもの現状を何とかしてほしいという訴えに、支

援者とご家族が一致しないことも多くあります。その結果、相談が継続することなく中断することも、たくさん経験をしてきました。

社会との関係について

ひきこもりの若者たちは、人づき合いがとても苦手です。コミュニケーション能力についても、メールとか文章だとできる方もいますが、面と向かってお話しすることが苦手な方も大勢いらっしゃるように思います。

そのことを前提とすると、日本の産業構造はコミュニケーション能力を最大限に重視した第三次産業が主流となっており、第二次産業であってもQC活動等の生産性向上のための職場内のコミュニケーションを重要視しています。

ひとりでコツコツ取り組む仕事が失われている中で、ひきこもりの若者たちが後ろからひっそりと社会へ潜り込むことが非常に難しく、ひきこもりの長期化に影響を与えていると言っても過言ではないでしょう。

【ひきこもり問題の本質的理解】

（長谷川私案）

①関係的貧困

孤立という貧困

②経済的貧困

収入を手にできないという貧困

③実存的貧困

生きる希望や意欲を失うという貧困

この三つは全部関連し合っています。例えば経済的な貧困は人間関係を希薄化します。そして、関係的貧困を生み出します。そうすると、生きる希望や意欲を失ってしまいます。

したがって単に就労意欲がないということではなく、構造的に就労する意欲を奪われていたり、社会参加の大きな壁があったりと捉えるべきだと思います。つまり一方的な、表面的な励まし等でひきこもり状態が解決するとは思えません。

さらに、この三つの貧困を解決するための制度・資源の貧困（**制度・資源的貧困**）がひきこもり状態を強化していると考えています。

しかし、希望は捨てていません。関係的貧困への働きかけはできます。この働きかけを通して実存的貧困を緩めることで意欲や欲望を喚起し、本人の動き出す機会の誕生を模索していきたいと考えています。

〈本人支援のための居場所〉

ひきこもる本人にとって必要な資源をどう作っていくのかという創造的な試みは大変必要なことです。ソーシャルアクションというソーシャルワークの方法論として、積極的に取り組まれるべきだと思います。手前味噌ですが、横浜にひきこもりの若者が利用できる地域活動支援センターを作ったことも、そうしたソーシャルアクションの一つだと位置付けているところです。

ひきこもり支援をめぐるテーマは多様です。ひきこもり支援を担当するセクションもさまざまなところがあり、ひきこもりの支援者も多様化しています。しかし、一見すると積極的な評価ができそうですが、実は新たな課題を生み出すことにもなります。連携・協働をどのようにつくっていくのか、そしてその連携・協働をどのようにご家族とご本人の支援に結び付けていくのかという課題を生み出すと言えるでしょう。

子どもと親との関係性で起きていることはいくつかありますが、注目すべきことはお父さんお母さんが手にしているゴール・目標とご本人が手にしているゴール・目標が大きく異なる場合は、ひきこもり状態に大きな変化が生まれない、あるいは何の進展もないと思います。よくあるパターンは、お父さんお母さんのゴールは働いてほしい、外出してほしいなど遠いゴールを目標にしがちです。しかし、子どもたちのゴールは親の目を気にしないでリビングでのうのうとテレビを見たい等の身近なゴールにしています。

車で例えて表現すると、左の前輪のお父さんお母さんは就労を目的地としている、右の前輪のお子さんはリビングでゆっくり過ごせることを目的地としている。この車はアクセルを踏むと大きくスピンして大破してしまう可能性があるわけです。つまり、より深いひきこもり状態を生み出す危険性もあると言えます。

これは親子だけではなく、実はご本人と援助職との間でも起こります。私たち援助職が就労・外出をゴールと考えると、ご本人の目指すゴールと異なる場合は、ご本人から援助職は見限られていってしまう。見限られていくとき、援助職はこういう言い訳をすることがあります。「やっぱりあの人はまだ準備ができてなかったんだね」と。それは、援助職の責任転嫁の言葉であると同時に、ご本人を援助する基本的条件がないと厳しく指摘させてもらっています。

〈家族支援の重要性〉

本人が最初から相談に登場しないことが多いため、まずは子どもに不安に感じられている家族の支援が重要になります。家族支援のなかでも家族相談は基本的なものです。家族相談を前提として家族教室や家族会という支援が必要だと位置づけられるべきです。

私は家族ワークショップに取り組んでいますが、家族教室と家族会だけでは大きくお父さんお母さん方は楽にならない、変わらないという経験をしてきました。お父さんお母さんの生き方そのものをダイレクトに変えていくということをネライとしているのが家族ワークショップです。子どものひきこもり問題に直接関係しないように思えますが、お父さんお母さんが抱えていた生きづらさが、そのままお子さんへの働きかけに結晶化して表れていることもあるのではないかと考えて、またひきこもりの状態の長期化や深化を防ぐために有効であることから取り組んでいます。あるいは、ひきこもり問題のほかに、家族関係問題をつくってしまっているお母さんやお父さんの生き方を緩めるという意味も持ち合わせています。

先日の家族ワークショップでは、10人ほどのお母さんお父さんが参加されて「いいとこ探そう」というワークに取り組みました。いいところを探そうというワークに取り組んでいるのに「だめなのよ、私は…。いいところなんか一つもないのよ。」と語ってしまうことから、「いいところ一つもないって言い切れる思い切りの良さといういいところがあるのよね。」と。つまり、ひとつの現象や状態を多面的に見る、認知を変えるということで子どもの理解と働きかけに取り組んでいます。

家族支援にとって何が大事か。家族も本人に遅れて外出できる緩やかなひきこもりになるわけですから、正しい情報提供の必要性と仲間同士で群れることが大切になります。

本人支援の内容も現在は多様です。相談が基本的な支援ですが、それと並んで居場所の持つ意味はとても大きいと考えています。その居場所は自由な居場所です。きっちりかっちりした居場所、ルールのある居場所では意味がありません。いつ来てもいつ帰ってもOK。発言しても発言しなくても、つまり消極的参加も積極的参加も、同じ参加に変わりはない、導かない・教えないということが大切にされる居場所が重要になります。

私は相談や居場所で失敗体験を話すことが多くありました。「この間大学でさあ、こんな失敗しちゃって、大目玉食らって怒られて…」と。つまり、失敗しても生きていけるんだというモデル提示ということを意識して話しています。つまり、失敗や問題を持っても生きていけるよと。彼らは強迫的な傾向が強いですから、失敗や問題があったら生きていけないと不安に感じて動き出せないでいることがあります。

【ひきこもり支援の方向性と課題】

①　アセスメントとスクリーニングの重要性と、家族の支援とが必要

（略）

② 自立についての批判的再検討の必要

私たちはなぜ就労神話を手放すことができないのでしょう。それは「働かざる者食うべからず」という考え方が徹底的に染み込んでしまい、それが私たちの国の基本的な考えにもなっています。しかし、そうでなくてもいいんだと提案することにしています。就労をゴールにする限りひきこもりの若者たちの社会参加は図れないというのではなく、働かなくても社会参加の形はあると言い切るぐらいのことがないと、ひきこもりの若者たちはさまざまなチャレンジをしないのではないかと考えています。

誰の力も借りないという「自立」ではなく、自分のことは自分で決定できるという「自律」をどれだけ持つのかということが大切になります。

命と暮らしが保障されているだけでは希望や意欲や生きる力は生まれません。これは先ほど牛島先生もお話しいただきましたが、そこにどういうつながり（関係性）がつくられるのかということが大事になると考えています。

現在の日本社会では、ひきこもっている状態からいきなり集団・組織に参加することは敷居が高すぎます。孤立と集団・組織の中間に位置するのが「居場所」であり、こうした居場所があまりにも少ない社会なのです。私たちは、こうした中間的な組織や集団という居場所をどれだけ作っていけるかという課題を持っているのではないでしょうか。この課題はこの社会に緩やかさと柔らかさを作ることにもつながっていくのではないかと思っています。

かかわることの意味と価値。つまり、つながりといっても深いつながり、リアルな人間関係、面倒くさい人間関係、だけれども安心で安全と実感できる。非常に矛盾しているように思われますが、そうしたリアルなつながりをどう作っていくのか。それが援助職としての役割・機能を提供するだけではなく、ひとりの人間としてひきこもりの若者と接する必要があるのではないかとお伝えしたいと思います。

ひきこもりのゴールをどう考えるか。「市民として行動する、社会に貢献する、そして自信を手にする。そして初めて賃金を得る・働くということにチャレンジする」ということが大事だと思っています。いきなり利害関係の真っただ中に、うまくいって当たり前の就労の世界にチャレンジするのではなく、他者とかかわる、他者との関係性に慣れる、時間と空間への身の置き方を手にするなどを経て、初めてご本人の意思で就労へチャレンジするという緩やかなプロセスがフィットしているのではないかと考えています。

③ 私たちの価値観を変えること

（略）

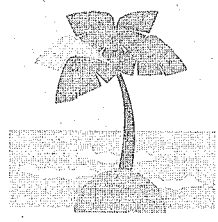
④ ひきこもり支援の地域ネットワークの構築

硬直的なネットワークではなく緩やかで柔らかい自在なネットワークを構想したいと思います。柔軟性を盛り込んだネットワークを構築するためには、関係者や関係機関が自分の役割や機能を一歩踏み出すこと。一歩はみ出すことを意識して実行することでしかネットワークは緩やかに機能しません。お役所仕事の代名詞のように言われる「できません」と話したら生きたネットワークとして働かなくなってしまいます。

⑤ お金と責任の所在

（略）

①から⑤の視点が生かされることで、地域でひきこもりの若者と保護者を支援することが可能になると考えています。これからはどこの地域でもひきこもり支援の連携・協働が豊かに整備されて十分に展開することが実際に求められている時代を迎えていると思います。



■平成27年度　精神保健福祉協会事業報告■

1　精神保健福祉普及啓発事業
　こころの健康フェスティバルあいち
　開催日　平成27年11月21日（土）
　場　所　名古屋文理大学文化フォーラム
　　（稲沢市民会館）

2　精神保健福祉に関する研究会等
　精神保健福祉シンポジウム
　開催日　平成27年９月５日（土）
　場　所　愛知芸術文化センター
　　アートスペースＡ

3　会議の開催
◇理事会
　開催日　平成27年６月11日（木）
　場　所　愛知県三の丸庁舎８階大会議室
◇広報普及部会
　開催日　平成27年10月１日（木）
　場　所　愛知県東大手庁舎８階81会議室
◇協会長表彰選考会
　開催日　平成27年８月13日（木）
　場　所　愛知県東大手庁舎８階81会議室
◇精神保健福祉基金審査委員会
　開催日　成28年２月19日（金）
　場　所　愛知県東大手庁舎８階81会議室
◇教育研修部会
　開催日　平成27年12月16日（水）
　場　所　愛知県東大手庁舎８階81会議室
◇常務理事会
　開催日　平成28年３月17日（木）
　場　所　愛知県東大手庁舎８階81会議室

■平成28年度こころの健康を考える講演会■

日　時　平成28年11月19日（土）
場　所　吹上ホール
プログラム
　第Ⅰ部　９：30～10：00　当事者のおはなし
　第Ⅱ部　10：00～11：40　講演
　「病としての窃盗癖について
　～常習窃盗者　1500事例の治療経験から～」
　講師　精神科医　竹村道夫先生
　　赤城高原ホスピタル院長

■平成28年度「こころの健康フェスティバルあいち」の開催のお知らせ■

日　時　平成28年12月17日（土）
場　所　穂の国とよはし芸術劇場（豊橋市）
主　催　平成28年度こころの健康
　　フェスティバルあいち実行委員会
記念講演　講師　姜　尚中氏
テーマ　「心の力」

編集後記

会報55号をようやくお届けする運びとなりました。

今回は９月５日に日本精神衛生会との共催で開催致しましたシンポジウムの特集となりました。あらためて読み直し、牛島先生のお話と各シンポジストの方々のお話しがどこかでつながっていることを感じました。多くの皆様に目をとおしていただき、いまの社会で生きづらさを抱える若者について、思いを寄せていただけたらと思います。

会員募集のお知らせ

当協会では、広く会員を募集しています。
年会費：個人会員（ 1,000円）
　　団体会員（15,000円）
　　賛助会員（50,000円）
納入方法はゆうちょ銀行振込用紙をお送りします。
お問合せは事務局までお願いします。

事務局　〒460－0001
　名古屋市中区三の丸３－２－１
　愛知県東大手庁舎
　愛知県精神保健福祉協会
　TEL　052－962－5377（内550）
　FAX　052－962－5375